

巻頭言

コロナ禍で作業療法教育を考える

県立広島大学 古山千佳子

現在、私たちの生活は、新型コロナウイルス感染拡大により大きく変化しています。不要不急の外出自粛、3密回避、マスクの着用、うがい・手洗い・手指消毒の徹底など、感染拡大を防ぐための新しい生活様式が求められています。それに伴い作業療法の教育方法も変更を余儀なくされました。

2020年度のはじめには、多くの養成校で対面授業が中止となり、オンライン授業が開始されました。不慣れな環境のなか、どうすればより効果的な授業ができるのか、学生の主体的な参加は可能なのかなど、混乱と試行錯誤の日々が続きました。また、私が勤務する大学では、緊急事態宣言発令に伴い、4月に開始予定だった4年次の長期の学外実習を中止し、オンラインを用いた代替実習に変更しました。その後、8月～9月に計画された2週間の地域臨床実習はかろうじて実施できましたが、2021年度以降の見通しありません。学生にとって臨床実習は、対象者と直接コミュニケーションを図りながら、実際の作業療法プロセスを観て、真似て学ぶ貴重な経験の1つです。今年度の卒業生の多くは、長期の臨床実習を経験することなく実践の場に出ています。臨床現場の皆様には、その点を十分理解したうえで、ご指導いただくようお願いいたします。

その一方で、この状況は私たちに新たな教育方法やコミュニケーション手段を身につける機会を与えてくれました。事前学習として動画を作成し配信したり、小グループのディスカッションを授業に組み込んだり、クイズ形式の試験を頻繁に行うといった工夫をすることで、対面でなくても効果的な学習の機会が提供できる可能性が広がりました。また、オンラインで開催される学会や研修会には移動時間を気にせず自宅で参加できますし、遠方の仲間たちと頻繁に会議や勉強会ができるようになりました。ただし、作業療法教育には、オンラインで出来ることもあれば、対面でしか出来ないこともあります。それぞれの利点や欠点を理解したうえで、上手に使い分けることが必要だと感じています。

昨今の新聞やマスコミの報道を見ていると、時に私たちは根拠のない偏った情報で他人を誹謗中傷したり、「政府が決めた政策だから」「大勢の人がしていることだから」といった理由だけで安易に自分の行動を決めてしまいがちです。そして、こういった行動は恐怖や不安が続き、日常の作業が奪われることで強化されているようにも感じます。これに対して「人は一時的な感情や身勝手な欲求に左右されることなく、何が正しいかを判断し、行動をしようと努力できる自律的な存在であること、そして、それゆえに人の判断や行動は尊重されるべきだ」というドイツの哲学者カントの教えが、私の心に浮かびます。先の見えない今だからこそ、不安や恐怖に惑わされることなく、今の状況で何をすることがより正しいかを自分で判断し、行動できる人になりたいですし、そのような自律的な人材を育て、社会に送り出す努力をしなければならないと思っています。